

新たな支援

—緊急支援の先／新たな子どもたちとの出会い—



【小友中学校の運動会】

「フレ～フレ～赤組、フレ～フレ～白組」という運動会おなじみの応援の声、小友小中学校のグラウンドに響きました。全校生徒 36 人。本当に小規模の学校なのですが、校庭に響く応援の声は、がれきを越えて山にこだまするように力強く響き渡りました。

小さな学校ですから、生徒たちは、競技に出場するか、応援しているか、どちらかに必ず参加しており、休む暇もない感じです。そして、先生方

も裏方でひっきりなしに動いておりました。借物競走では、運動会を見学している者みんなの協力が求められ、途中には「テレビカメラを持っている人」の借り物もあり、会場が笑いに満ちるような場面もありました。

22日(日)は、あいにくの雨でした。運動会はどうなるのか、そんなことを心配する朝でした。というのも、支援をしている中で、小友中学校の「運動会」は、震災との区切りの一つと意味づけされていることを感じていたからです。ですから、今回の支援物資は、運動会使用のものばかりでした。小友中学校での震災との最初の区切りは、私たちは立ち会うことはありませんでしたが、卒業式・終業式であったろうと思います。次が学校再開。そして、今回の運動会。このように、行事を柱としながら「震災」との区切りをつけて前に進んでいるように思います。現在、日本の学校の一般的傾向として、学校行事は、現在、削減される傾向にあります。「行事より学習」「行事の指導が大変」といった理由が主なもののようです。しかし、震災から立ち上がっていく過程の中に、学校行事は「区切り」としての大きな意味をもち、子どもたちの生活にめりはりをつけていると思いました。

「運動会」という区切りを経て、学校支援も「緊急支援の先」が必要になってきています。現在進めているのは「理科室」支援です。小友中・広田中ともに、理科室は1階にあり、教材・教具が壊滅という状態です。既に両校からは、理科室復興のために必要な物品リストをあげていただいておりますが、全てを新品で揃えると1校200万～300万円、両校で500万円程度が必要となります。現在、理科の先生のご協力と理科教材の提供が可能と思われる方々と連絡をとり、さらに支援先を広げて「理科室」支援を進めております。早ければ、第1回「理科室」支援物資の提供は、今週末に行えるところまでできました。しかし、課題はそれだけでなく、続くのが、「技術・家庭科室」支援となります。

今回は、陸前高田市の教育委員会を再度訪問し、学校予算の配当についてうかがいましたが、「例年通りの予算以上のことは、現在はできていない」とのことでした。政府

レベルで復興法案がようやく審議入りしたところで、陸前高田市での議会開催のメドはたっていないという状況のもとでは致し方ないことと判断されます。その中で、子どもたちの日常の学校生活を「教育の平等」の理念のもとにおくように行動するのが、支援者側に求められていることだろうと思います。

【万石浦の子どもたち】

21日(土)、万石浦中学校避難所の子どもたちへの学習支援がスタートしました。

昼間の避難所は人影も少なく、大人も子どもたちも外へ出ているようです。特に中高生は、部活動に参加しているようで、ほとんどその姿を夕方まで見ることはありませんでした。

教室のお掃除をして、2時に教室を開きましたがしばらくは反応無し。そこで子どもたちにお誘いの声かけを直接おこないました。声をかけると意外に素直に参加する子どもや、いやだというそぶりを見せながらも、だんだん教室に近づいてくる子ども。それぞれではあってもやがて6人の小学生が席に座って、大人とマンツーマンの学習が始まりました。中には、避難所に遊びに来たという子どもも、遠慮がちではありましたが、歓迎ムードに押されて机の前に座ったのです。

今回は、学校での自分の様子や学習の状況などの聞き取りから始めようというスタッフ間の打ち合わせでしたが、実際にはすぐに勉強したがる女の子や、学習よりも遊びの相手を大人にして欲しくてしょうがない男の子など、それぞれの机の内容はすぐにバラバラになっていきました。子ども同士のやりとりも生まれ、楽しい雰囲気です。2時間が過ぎました。

次回の約束をして教室を終了したあと、スタッフでミーティングを行っていたときも、教室に入ってくる子どもがいて、はっきりと体中で「一緒に遊んでよ」の雰囲気を醸し出しています。そんなことがきっかけで、今「さよなら」したばかりの子どもたちの、避難所での様子を何気なく観察してみると、避難所での子どもたちは、これといった居場所がなく、避難所の周りをまるで「さまよっている」ようでした。

陸前高田での支援の拠点にさせてもらっているモビリア避難所はこぢんまりとしていて、子どもたちがまとまって遊んでいる姿を見慣れていただけに、なにか違うものを感じました。

子どもたちに声をかけて周囲を案内してもらおうと、避難所の裏の運河に連れて行ってくれました。そこには、地震による地盤沈下で、運河のふちすれすれの水が流れている風景が広がってました。大潮の時にあふれた水のあとが、白い塀にくっきりとついていました。案内してくれた一人の子どもの家も運河のそばにあ



り、家は目の前にあっても避難所で生活していることを話してくれました。また、親たちは昼間は忙しく、ほとんど一人で避難所で時間を過ごしていることも教えてくれました。

学習や学校生活に子どもたちが向かう前に、整理してあげなければいけないことが山積みしてるようで、土曜日だけの支援の限界を早くも感じるようになりました。

5時からは中高生の教室を計画していましたが、ちょうどその時間が夕食が配られる時間でもあり、実際に2人の中学生が顔を見せてくれたのはもう6時を過ぎた頃でした。数学を1時間ほど集中してやっている姿を見ると、小学生とは違って、学習の遅れを本当に気にしていることを感じ取り、小学生と中学生の課題の違いに気付かされました。たくさんの知恵と力を借りて、万石浦での支援を進めていかなければならないようです。



【メディアを考える】

この支援通信の読者のみなさんは、この通信の配布先をご存じでしょうか。No.1、2の通信は、支援する側を強く意識して書いていました。支援を始めるには、金銭的にも、人的にも、物的にも、多くの資源を必要としておりましたから、それは必然でありました。加えて、支援地である陸前高田市を訪れた際にも、通信のことには特に触れてはきませんでした。それは、「こちら側のことを、わざわざ伝える必要はない」という判断のもとのことです。

しかし、「このお金はどこから出ているのですか？」という被災地での声をきっかけに、支援通信を支援先にも配るようになりました。私たちが被災地で何を見て、何を感じ、どう考えて、どう行動しているのかを知ってもらうことは、私たちの支援を受け入れる／受け入れない、受け入れるとしたらどこまでなのか、などの選択の余地をつくることにつながると判断したからです。現在では被災地の支援先には、この支援通信とともに支援物資を提供し活動を行っております。

支援通信の配布先の変化の中で、支援通信を書くときの書き手のスタンスにも、変化が生じています。前回の通信に、「盛り上がり」≠「継続」というタイトルは掲げましたが、支援提供を呼びかけるだけの時は、たぶん「盛り上がり」の要素がありました。しかし、支援する側／支援される側の両者に届くとなると、両者をつなぐ重要なメディア（情報媒体）に変化し、支援先で「読ませてもらってます」という声にあえば、メディアとしての役割を一層感じ、何を感じ、何を書くのかに、責任も戸惑いも感じます。

支援を始める当初、災害に見舞われた場所に、外部の人間が足を踏み込むことへの躊躇を感じ、神奈川でできることを考えておりました。しかし、今や繰り返し足を踏み入れ、さらに活動の範囲を広げることになり、支援隊に加わる者を増えています。そうした変化のなかで、支援隊に加わるメンバーそのものが、メディアの役割を果たしているように思うのです。支援先の地でどのように振る舞うのか。支援地を離れた私たちの日常の中で、それをどのように伝えるのか。支援隊に加わる者たち、一人ひとりの責

任も一層大きくなっていると感じています。

【今後の支援の予定】5月24日現在

- 5月28日（土）～5月29日（日）の第9回支援（2部隊構成）
土：小友・広田中への支援物資搬入、モビリア避難所の子ども支援
万石浦中学校の学習支援、
日：モビリア避難所子ども支援

【ご協力いただきたいこと】

1. ご提供いただきたい物資
※提供できそうな物品があればご連絡ください。
2. 同行していただける方
※参加可能な週末をお知らせください。

【ご協力に感謝!!】

- 今回の支援隊のメンバー（13人） 柿本隆夫（引地台中学校）、
家上幸子（Ed.ベンチャー事務局）、清水睦美（東京理科大学）、荻谷夏子、
松永雅文（大和市教育支援教室）、吉間里依（大野原小学校）、清水寛（屋代高校）
古浦新司（東京理科大学学生）、清水麻美（長野西高校中条分校）、清水いく江、
すたんどばいみー：チューブサラーン、チャンソワンナリット、長畑シゲミ
- 小友小中学校（陸前高田）
①寄付からの買い出しによる支援：運動会使用器具
②支援物資の提供：理科教材カタログ
- 広田小中学校（陸前高田）
①支援物資の提供：プリンター、野球ボール、敷き布団、鉛筆、理科教材カタログ
②寄付からの買い出しによる支援：HDD、事務用品、
- モビリア避難所（陸前高田） ①支援物資からの提供：ジャージ（13枚）
②すたんどばいみーの子ども支援（3人、2日間のべ7時間）
- 万石浦中学校（石巻） ①子ども学習支援（10人、6時間）
- ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）5/14～5/21
児島明（鳥取大学）、眞田修税理士事務所、荻谷夏子、洲崎仁美（大和中学校）

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp



